

「平和への一歩を」

星野高等学校 2年 吉田 結

鳴り響く爆撃音に、私は息を呑んだ。

私はロシアの文化や言語に強く惹かれ、ロシア語の習得を志している。言語交換パートナーとして、ロシアやウクライナの友人も多く、ビデオ通話などで雑談も交えながらお互いの言語を教え合っていた。しかし、ロシアがウクライナへ侵攻してから何もかも変わってしまった。

私は知らせを聞きすぐにウクライナに住む友人達に連絡をし、ほぼ全員から一ヶ月以内に返信が来たが、未だにその中の四人とは連絡が取れていない。侵攻からしばらく経ったある日、戦火の真っ只中にいる友人とビデオ通話する機会があった。友人は安全な所にいると言っていたが、通話中に近くで爆撃があり、耳を劈くような音が聞こえた。手が震えてしかたない程の恐怖と命の危機を感じたのだ。たかがビデオ通話だけと思うかもしれないが、私には十分すぎる程戦場が、恐怖が焼き付いた。ニュースで見る感覚とは全く違う。そこには大切な人達がいて、リアルタイムで爆撃が起きている。私の中からは今でもあの光景と音が焼きついて離れないのだ。

沢山のことが瞬く間に変わってしまった。例えば友人といつか一緒に行こうと話していた、ハリコフにある市場。今は焼け焦げて、まるで原爆ドームのように骨組みだけになっている。目を疑う程変わり果てていた市場の残った骨組みだけは全く同じなのだ。

友人達はどのような状況なのか、それは彼らからのメッセージでしかわからない。遠い国にいる彼らと私を繋ぐものはメールしか無い。返信が途切れれば最後、どうなったか私は知るすべがないのだ。しかし、友人の周りの人と連絡先を交換していた場合、知ることができる。私の友人の中にも、なにかあった時の為に親御さんの連絡先を教えてくれた友人達がいた。

友人の一人は戦争で亡くなった。笑顔が素敵な優しい友人。最後の会話は私の京都への旅行の話で、戦争が終わったらいつか日本に行きたいと話していた。その後、友人の親御さんからそのことを知らされたのだ。夢もあった、楽しい話もした、同世代の友人の若い命が何故失われなければいけないのだろうか。もしかしたら返信が来るのではないかと、戦争なんて悪い夢で、いつものように友人はビデオ越しに向日葵のような笑顔を向けてくれるのではないかと。今でもそう願っている。しかし、失われた命はもう戻ってこない。願っても叶わない。いくら待ち続けても返信は来ない。街の風景もすぐには元に戻らないのだ。

戦争に反対しながらも戦争に行ってしまったロシアの友人達もいる。彼らと同時期にお兄さんが戦争に行ってしまったと言っていたある友人が私にこう言った。「私達は強いから、どんなことでも生き抜いていける」と。その言葉を聞き、私ははっとした。そうだ、嘆いてばかりでは駄目だ。この体験を沢山のの人に伝えなければ。そして私は、地域の人々や学校の先生や友人に声をかけ有志を募り、沢山の人の協力の下、七月二十三日に地元で行われた祭りで場所を借り、ウクライナへの募金活動を実施。二百人以上の人々が募金に協力をしてくださり、大成功に終わった。そして、八月二十六日にはウクライナ大使館へ行き、集まったお金を渡すことができたのだ。私は直前まで募金活動をやるか迷っていた。ロシア軍にも友人がいるからだ。しかしロシアの多くの友人達に、相談した際に、やり遂げて、応援しているからと言われ、私は募金活動をやることを決意した。募金が終わった今では、沢山のの人にスピーチを通してこの体験を伝えている。

これは小さな一歩かもしれない。しかし、この活動を通して、沢山のひとと繋がり、思いが伝えられたことに大きな意義があると私は感じている。私はこれからもこの繋がりを大切にし、この体験を沢山のひとへ伝えていく。平和な世界を信じて。